

ChildFirst司法面接トレーニングプログラム

リタ・ファレル (BS)

ビクター・ヴィース (JD, MA)

キーワード：司法面接、多機関連携チーム、多重被害、裏付け証拠

ChildFirst®プロジェクトは、国際的、全米および各州の司法面接者と多機関連携チーム（MDT）を研修する取組みであり、以下の機関によって開発、運営されている—ゼロ・アビュース・プロジェクト（ZAP）の児童保護専門家および米国、日本、コロンビアの児童保護機関の専門家。

FindingWordsからChildFirst®まで：歴史の振り返り

ChildFirst®の歴史は1998年に遡る。FindingWordsと呼ばれた当初のプログラムは、全米子ども虐待事件起訴センター（the National Center for Prosecution of Child Abuse: NCPA）とCornerHouseの協働によるものだった。当時、司法面接の全国的な研修プログラムは、米国でも数えるほどしかなく、多くのMDTは、5日間のコース、特に州外への旅費やその他の経費が必要になるコースに参加するための資金が不足していた。より多くのMDTが司法面接の研修を受けられるようにするため、NCPAとCornerHouseは、旅費と経費を連邦政府が負担する「FindingWords」を全米レベルで開催した。

NCPAとCornerHouseが初めてこのコースを開催した際には、定員40人のコースに全米から400人以上の専門家が応募した。このコースに対する反響は、多くのMDTメンバーが司法面接の研修を受けることができていないのではないかと推察を裏付けるものであったが、全米レベルで研修を実施しても、政府が費用を負担してもこの需要を満たすには不十分であることも明らかになった（Vieth, 2006）。

このニーズに対応するため、NCPAは米国保健福祉省から4年間の助成金を受け、全米水準の面接技術を満たしながら、司法面接研修を実施するファカルティーを州ごとに養成するプロジェクトを提供することにした（Shabazz & Vieth, 2001）。この連邦政府の資金援助の結果、NCPAは「トレーナー養成プログラム」を開発し、州の行政機関等が地元でファカルティーを養成できるよう支援した。これは成功モデルであることが証明され、多くの州が、そして最終的には他の国もこのコースを実施することになった。州レベルでコースがあちこちで開催されたことで、FindingWordsは「米国で最も広く訓練された調査・捜査面接の仕組みの一つ」（Faller, 2015, p.49）として、「非常に影響力のある」司法面接のトレーナー・チーム（ファカルティー）養成研修モデルとなった。

2007年、このプロジェクトはその名称を「*FindingWords*」から「*ChildFirst*®」に変更し、全国的なプログラムとして全米児童保護研修センター（the National Child Protection Training Center: NCPTC）の管理下に置かれた。2013年、CornerHouseは新たな司法面接のプロトコルを開発し、NCPTCと州および国際的な司法面接研修プログラムは、*ChildFirst*®のプロトコルの開発に共同で取り組んだ。2019年、NCPTCはバージニア州とミネソタ州に事務所を持つ非営利団体Zero Abuse Project (ZAP)と合併した。合併後、ZAPは*ChildFirst*®プロジェクトに多くの人材や研修資料を追加した。

現在、*ChildFirst*®は、国際的、国内的、および、州のコースを提供するだけでなく、司法面接者やMDTの他のメンバーのスキルを向上させるための多くの上級コースやその他の研修資料を持っている。

ChildFirst 司法面接トレーニングコース

ChildFirst®は、子どもの権利擁護センター（Children's Advocacy Center or Child Advocacy Center: CAC）で働く司法面接者のための全米児童同盟の研修基準を満たす5日間の司法面接研修プログラムである（National Children's Alliance, 2017, p.2）。このコースは、講義とディスカッション、読書、電子的に記録された面接のレビュー、スキルアップのための演習、そして参加者それぞれが俳優と模擬司法面接を行い、ピアレビューアーとして10回もの面接に参加する実習で構成されている。このコースは個人でも申し込むことができるが、チームの一員として参加することを強く推奨している。各受講生は筆記試験に合格し、受講証明書を取得する必要があります。ZAPの教授陣とコンサルタントは、全国レベルでこのコースを教えている。

ChildFirst 国際コースと州コース

また、日本では「Child Maltreatment Prevention Network」を通じて、コロンビアでは「Safer Children and Women International」を通じて、*ChildFirst*を指導しています。また、私たちの「トレーナー養成」プログラムを修了したファカルティーは、州レベルでも*ChildFirst*を指導しています。これらの州は以下の通りです：アラスカ州、アーカンソー州、コネチカット州、デラウェア州、ジョージア州、イリノイ州、インディアナ州、カンザス州、メリーランド州、ミネソタ州、ミシシッピ州、ミズーリ州、ニュージャージー州、ノースカロライナ州、オハイオ州、オクラホマ州、ペンシルバニア州、サウスカロライナ州、バージニア州、ウェストバージニア州。また、ニューヨーク州では毎年約20回、医師がこのプログラムを実施している。

ChildFirst® アドバンスト・コース

*ChildFirst*のファカルティーは、毎年、国際、国内、および州の子ども虐待学会で、多くのアドバンスト・ワークショップを開催しています。例えば、司法面接やMDTの調査で生じる倫理的問題についてのワークショップを開催しています。また、子ども虐待の精神的影

響（Walker, Reid, O'Neill, & Brown 2012; Russell, 2018）、司法面接でこれらの問題がどのように生じるか（Tishelman & Fontes, 2017）、そして司法面接ユアーや他のMDTメンバーは、この力学に対応することができる（Vieth, 2010a; Vieth & Singer, 2019）。

ChildFirstは、多くのトピックに関するアドバンスト・ワークショップを提供するだけでなく、各州がそれぞれの地域社会で開催する2つのアドバンスト・コースも提供している。

ChildFirst® EX

ChildFirstEXとは、トラウマ症状のある子ども、特別なニーズのある子ども、注意の持続時間が短いというような発達上の課題のある子ども、多重被害の疑われる子ども、その他の要因のために、標準的な1回の司法面接では成功しないかもしれない子どもたちのための拡大司法面接プロセスである。これを研修する拡大司法面接研修では、マルトリートメントの疑われる子どもや犯罪やDVを目撃した子どもに対して、司法面接を重複無く複数回セッションに分けて調査・捜査をすることの正当性を支持する研究とともに、拡大司法面接プロセスについて詳しく講義する。

ChildFirst® EXは、どのような司法面接プロトコルを使っている司法面接者でも利用することができ、講義だけでなく、参加者が拡大司法面接を実施するためのロールプレイも豊富に含まれている。

司法面接者のための出廷研修

これは2日半のコースで、司法面接者と検察官がチームを組んで模擬裁判を経験する。チームは模擬の主尋問と模擬の反対尋問をロールプレイで学ぶ。被告人弁護人を演じる法律家が各チームの司法面接を批判する反対尋問を行うので、模擬法廷で当該チームの司法面接者はこの反対尋問に答え、検察官は司法面接者に再主尋問を行って、司法面接の証明力を立証しなければならない。Zero Abuse Projectのファカルティーとコンサルタントは、参加者一人ひとりのスキルを向上させるための具体的なアドバイスを行う。また、学生の場合は専門家証人として、当該司法面接について法的基準に照らして信頼性・妥当性を証言するワークショップを受講する（Vieth, 2009b）。

ChildFirst司法面接プロトコル

プロトコルの基礎

ChildFirst®は、他の主要な司法面接トレーニングプログラム（APSAC、CornerHouse、NCAC、NICHD）の代表者たちとともに、「虐待や暴力等の被害を受けたことが疑われる事例において、子どもに司法面接を実施する司法面接者が一般的に受け入れているベストプラクティス」を反映した司法面接研修ガイドを作成し（Newlin et al.）、少年司法・非行防止局（the Office of Juvenile Justice and Delinquency Prevention: OJJDP）が『Child Forensic Interviewing（子どもの司法面接）：ベストプラクティス』を出版した（Newlin et al.）。こ

のガイドは*ChildFirst*®司法面接研修受講者の必読文献であり、*ChildFirst*®プロトコルの基礎になっている。

プロトコルにおける倫理的配慮

ChildFirst®プロトコルの倫理的最優先原則は、「男児であれ、女児であれ、子どもの最善の利益を優先し、子どもの認知的・身体的・情緒的・心理的ニーズと能力に配慮した方法で子どもたちと面接すること」である。この最優先原則は、MDTが子どもにトラウマとなる可能性のある画像を見せるなどの倫理的課題に直面したときに、しばしば重要な意味を持つ。

司法面接は単独では成り立たない

司法面接は、子ども虐待調査全体を構成する要素のひとつである。したがって、司法面接は、司法面接者だけでなく、児童保護ソーシャルワーカー（児童福祉司）・警察官・検察官・医療者（専門的訓練を受けた医師等）・精神保健の専門家（セラピスト）を含む多機関連携チーム（Multidisciplinary Team: MDT）の枠組みで実施されるべきであると我々は考えている。*ChildFirst*®は、MDTが協力して裏付け証拠を得ることに重点を置いており

（Vieth, 2010b）、これには、犯罪現場を日常的に写真撮影することも含まれる（Vieth, 2009a）。容疑者の取調べ、加害者でない養育者やその他の家族からの聞き取り、犯罪現場の写真撮影、教師・近隣住民・その他の目撃者となりうる人々からの聞き取りは、子どもに何が起こったかを判断するうえで極めて重要である。裏付け証拠は、事件が起訴されるかどうか、あるいは、有罪判決が出るかどうかについても重要な役割を果たす（Cross & Whitcomb, 2017）。

プロトコルの一般原則

ChildFirst®は、司法面接を実施する際、チェックリストや「チェック・ザ・ボックス」のようなアプローチは取らない。その代わりに、司法面接者やMDTメンバーが下す判断すべてにおいて、子どもの個別のニーズを最優先にしている。司法面接者が行うすべてのことには目的がなければならず、法的な根拠を持つものでなければならないというのが、私たちの信念である。プロトコルの各段階は、ベストプラクティスを反映し、裁判所管轄区が子どものニーズを満たすために*ChildFirst*®プロトコルを適応できるように設計されている。*ChildFirst*®は、自由報告形式の質問テクニックを重要視しつつ、砂時計の聞き方を遵守することを子どもへの質問の原則としている（Newlin et al, 2015）。

プロトコルの開発

ChildFirst®プロトコルは、我が州だけでなく、州外の専門家にも協力してもらって開発された。このプロトコルは、司法面接研修プログラムが実践されているすべての主要な司法面接プロトコルを検討して開発したものである（Faller, 2015）。このプロトコルには、主要なモデルに共通する特徴が盛り込まれており、性虐待（家庭内・家庭外）・身体的虐待

待・心理的虐待・ネグレクト・暴力の目撃・拷問（子どもに身体的・心理的苦痛を与える折檻）など、あらゆる形態のマルトリートメントを包括的に調査・捜査する多重的被害スクリーニングが含まれている（Knox et al.）Recognizing Abuse Disclosure Types and Responding (RADAR)司法面接研修プログラムで採用されている司法面接の「デシジョン・ツリー」法は、複数の類型に跨がる虐待・ネグレクトの調査に役立つ。

ChildFirst®プロトコルの4つの段階

ラポール

ラポールの目的は、子どもが司法面接に慣れるようにして、語りを促すことである。ラポールでは、面接者は子どもに席についてもらい、自己紹介をし合う。そして、「エピソード記憶を想起して語る」ナラティブ・プラクティスを行う。これは、視覚・嗅覚・聴覚・味覚・触覚・温痛覚・位置覚などの感覚情報を収集しながら、マルトリートメントではない楽しい話題・好きな話題について、どうやって始まって、何が起こって、どうやって終わったかを語ってもらう練習である。ラポールには、子どもが誰と一緒に住んでいるのか（ファミリーサークル）、子どもは家族一人ひとりや家によく来る人たちとどのようなことをするのが好きなのか・楽しいのか（ポジティブな関係性）について話を聞いたりする。

ChildFirst®司法面接研修では、この面接はいつもの子どもと大人のやりとりとはどのような違いがあり、どのような態度でこの面接に臨んでほしいのかを子どもに理解してもらうインタビュー・インストラクションの伝え方、真実を話す約束（宣誓のようなもの）、嘘・本当の話（True or Lie Discussion）、その他、裁判所管轄区から要請される可能性のある事項をどのように組み込むか、組み込まないかを実践的に研修する。各州のトレーナー・チーム（ファカルティー）は、これらの事項のうち、州法等に照らし合わせたうえで、どれを司法面接に加えるかを研修する。

ChildFirst®は、ラポール（話の出来る関係の構築）はプロトコルのラポールの段階だけで築かれるものではなく、面接全体を通して維持される必要があることを受講者に明確に示している。

心配されている課題への移行

プロトコルのこの段階の目的は、マルトリートメント（虐待&ネグレクト）の可能性について語ってもらうための枠組みを提供して、それらを話してもらう段階（詳細の探索）に導くことである。プロトコルのこの段階で、司法面接者はすべての子どもに対してオープン・インビテーションとして「今日ここに来ることについて何て聞いている？」（5歳以下の子どもの場合は、「今日はだれと一緒に来た？ その人はここに来ることについて何て言っていた？」と具体的な人を想起できるように聞く）などの質問をし、この司法面接につい

て誰かに言われたことがあれば、それを子どもに尋ねることで、自由報告を得られる可能性が高まる。もし、オープン・インビテーションで開示が得られない場合、司法面接者は、子どもの状況に応じてフレキシブルに選べる "デンジョン・ツリー"を用いて、(主にネガティブな) 家族関係を探るルートか、アナトミカル・ダイアグラムを使って子どもが呼んでいる体の部位の呼称を司法面接者と共有するルートを選ぶ。後者のルートでは、子どもにとって "ポジティブ"なタッチと "ネガティブ"なタッチについて聞いていくことで被害開示に導くことができる。また、アナトミカル・ダイアグラムのルートを使うと、性的な接触でなくても、身体的虐待が語られることもある。また、ネガティブな家族関係を探ったり、アナトミカル・ダイアグラムで被害を聞いていくことで、子どもたちは家で怖い思いをしていることやママが殴られているのを目撃したこと、家の中は怒鳴り声で満ちていることなどを開示することもある。この段階で、「食べ物がないとおなかが痛くなるから、嫌だ」と語った子どももいた。メソアンフェタミンを家の中で作っている家庭で育った子どもが「おいしい料理はOKだけど、まずい料理はダメ」と語ったことから、薬物の問題が判明したこともある。デンジョン・ツリーの一方のルートを通った後、反対の方のルートを使うことで、子どもが経験したり、目撃したりした事実はもとより、他の種類のマルトリートメントが語られていくかもしれない。

詳細の探索

ラポールの段階のナラティブ・プラクティスで子どもがエピソード記憶を想起して語ってくれたときに、司法面接者がアセスメントした子どもの供述能力を応用して、子どもの語りによって詳細を得て、マルトリートメントのあらゆる可能性を探ることがこの段階の目的である。さらに、詳細の収集中や収集後に、司法面接者は語られた内容に関して、別の仮説(虐待・ネグレクトではない可能性など)や他の解釈がなされ得る可能性を探る。この段階は、司法面接の中で、前に開示されたことや司法面接が実施される前に開示されたこと以外の他の種類のマルトリートメントを子どもが経験している可能性を探るもう1つの機会となる。*ChildFirst*®司法面接研修では、このスクリーニングのための文例が教材として提供される。

子どもが性的搾取画像に写っている可能性をスクリーニングする場合、司法面接者は「誰かがあなたに、服を着ていない人の写真やコンピューターの画面、動画を撮ったり見せたりしたことある？」と尋ねることができる。身体的虐待をスクリーニングする場合、「あなたのおうちで、家族に困ったことはある？」と尋ねるのも一つの方法かもしれない。配偶者暴力(DV)や大人同士の暴力に関してであれば、司法面接者は「あなたのおうちで、大人が喧嘩したりする？」と尋ねることができる。心理的虐待の可能性を探るには、「家族(大人)があなたを呼びつけて意地悪なことを言ったりする？」と尋ねることも考えられる。ネグレクトの可能性や虐待等の危害に関するリスクを評価するために、司法面接者は「あなたのおうちの誰かが、お酒の問題を抱えている？」とか、「あなたの家族で誰かが薬物をやってる？」と尋ねることもできる。

ただし、このような質問ができるのは、司法面接の中で、子どもがまだこのような虐待の可能性を開示していない場合のみである。もし、子どもが他の種類のマルトリートメントを受けていることを開示したなら、そのときに、司法面接者は子どもに「それについてもっと教えて」と尋ねる。

この段階において、*ChildFirst*®司法面接者は、子どもが虐待を受けた場所（間取りや犯行現場となった部屋にある家具の配置など）や虐待がどのようにエスカレートしてきたかの全容を詳しく説明できるようにタイムラインを引くなどの描画を活用したり、性的接触が起こった部位や虐待事実を明確にするのを助けてくれるアナトミカル・ダイアグラムやアナトミカル・ドールを使用することができる。しかし、アナトミカル・ダイアグラムやアナトミカル・ドールは決して、子どもの言語開示に取って代わるものではなく、むしろ、子どもが言語開示をさらに明確にしたり、追加的な詳細を提供してもらったりするのを助けるものである。

終結

終結の目的は、司法面接を尊厳のある終結で終了し、子どもに質問や心配がないかを尋ね、安全のためにできることを子どもと話し、子どもをニュートラルな状態に戻してあげることである。子どもは虐待が悪いことだと認識していない可能性があるため、司法面接者は終結の段階で、安全教育というレクチャーに重きを置いてはいけなく、司法面接者は、子どもが家庭で安全だと感じているかどうかを尋ね、家族内外で子どもが相談できる安全な人を見つけられるように安全確認をする。

あらゆる形態の虐待に対するモデルの適応性

ChildFirst®は、開発の当初から常に、複数の虐待に対応できるモデルであったが、2013年に多重被害スクリーン（または、セイフティー・スクリーニング）を取り入れた。これは、通告・通報の内容や司法面接の中で明らかになった虐待の類型に関係なく、他の虐待の可能性がないかどうかを子ども一人ひとりにスクリーニングすることを意味する。

司法面接者は、家族関係を探ったり、司法面接中や司法面接の前に開示された内容の詳細を調べる際に、このセイフティー・スクリーニングを行うことがある。前述したように、*ChildFirst*®には、フレキシブルな枠組みを提供してくれるデシジョン・ツリーがプロトコルに組み込まれていて、司法面接者は、面接のどの時点でも、適宜、あらゆる種類のマルトリートメントを探索することができる。

ChildFirst®に多重被害スクリーニングを含めたのは、ひとつの種類の虐待を経験した子どもは、複数の種類の虐待・ネグレクトを経験することが多いからである（Turner, Finkelhor, & Omrod, 2010; Finkelhor, Omrod, & Turner, 2007）。子ども虐待の全容を把握することは、子どもと家族のニーズに対応するサービスを選択するうえで極めて重要である。

特別な背景を持つ子どもたちの司法面接と拡大アセスメントまたは 複数回インタビュー

ChildFirst®は、APSACの司法面接ガイドラインに記載されている結論に同意する：

調査や事実認定のプロセスを1回の面接に限定する原則は推奨されない。...面接の回数は、子どもから正確な情報をすべて引き出すために必要な回数とすべきである。1回の面接で十分なきときもあるが、誘導せずに、オープン・エンドの質問を使うのであれば、複数回面接（拡大司法面接）によって追加の関連情報を得ることができる（APSAC Taskforce, 2012, p.9）。

ChildFirst®は、司法面接者は、重複の無い追加セッションを必要とする子どもたちのニーズに応えるため、2日半のトレーニングコースを開発した。この*ChildFirst*®EX司法面接プロセスは、トラウマ症状を呈している子どもや話したがらない子ども、多重被害の子どもや複数の種類の虐待・ネグレクトが合併している子どものように、通常の単回セッション司法面接では成功しない可能性のある子どもたちに司法面接を実施するうえで、目的を持って、かつ、弾劾されても反論できるだけの信頼性と妥当性を身に付けて実践すべきプロセスである。また、人身取引の被害児、就学前の子ども、発達上の課題や、言語・認知に課題のある子どもは、拡大司法面接プロセスを適用すべきことが多い。

司法面接者が誘導的・示唆的・強制的な質問を避けるのであれば、拡大司法面接プロセスという複数セッションの司法面接には一定のメリットがあることが、研究で実証されている（Hershkowitz & Terner, 2007）。マルトリートメント被害児や目撃児に対して実施された重複の無い複数回セッション面接を支持する研究は、研修コースの教材となっている

（Faller, Cordisco Steele, & Nelson-Gardell, 2010; La Rooy, Katz, Malloy, & Lamb, 2010; La Rooy, Lamb, & Pipe, 2009）。

ChildFirst® EXは、どのような司法面接プロトコルの実践者でも利用することができ、拡大司法面接プロセス研修には講義だけでなく、受講者が拡大司法面接を実施するうえで重要なロールプレイも含まれている。

司法面接においてツールを使用することに関する*ChildFirst*®の見解

大人は、子どもたちが言語で自分の経験を語ることを強く望むものだが、子どもたちの中には、言語能力が限られている子どももいて、その子たちは複数の非言語コミュニケーションを使うかもしれない。キャスリーン・クールボーン・ファラー博士は、ツールを使うことの「経験的にも実践的にも確かなメリット」を6つ挙げている（Faller, 2007, p.11）。これらの利点は以下の通りである：

1. 子どもたち、特に幼少児たちは、ある出来事や経験を説明するよりも、それを実演する方が得意かもしれない。
2. ツールを使用することで、司法面接者と、さらに重要なこととして子どもに対し

て、言語と行動という2つのコミュニケーション手段を提供してあげることができる。

3. ツールを使うことで、誘導的質問の数を減らせることがある。なぜなら、司法面接者が直接的な質問（クローズド・クエスチョン）を繰り返すことで詳細を探ろうとするのではなく、子どもがアナトミカル・ドールを使ったり、描画したりして自分の経験を示すことができるからである。
4. ツールによっては、子どもの記憶を呼び起こす「手がかり」になることがある。
5. ツールによって、話したがる子どもたちが虐待を開示できるようになるかもしれない（Dickinson & Poole, 2017）。
6. たとえ、子どもが虐待の経験を司法面接者にわかってほしいと思っても、話すより、見せる方がストレスが少ないこともある。

ChildFirst®は、アナトミカル・ドールの使用方法が適切であり、研究結果や適用されるガイドライン（Gundersen National Child Protection Training Center, 2016; Faller, 2005; Faller, 2007; APSAC Taskforce, 1995; Everson & Boat, 1994）に適合した方法で使用されるのであれば、積極的にアナトミカル・ドールを使用する。つまり、アナトミカル・ドールを導入する正当な目的があり、子どもが表象のシフトの能力を持っていて、アナトミカル・ドールというツールを導入する方法が適切であるという条件を満たして、子どもがマルトリートメントを言語で開示した後にのみ、デモンストレーション・エイドとして使用するのであれば、アナトミカル・ドールの使用は適切であるというのが我々の見解である

（Hlavka, Olinger, & Lashley, 2010）。*ChildFirst*®の国際的、国内的、州レベルのプログラムは、アナトミカル・ドールに関する研究とその適切な使用、不適切な使用に関する詳細な文献レビューを公表している（Gundersen, 2016）。

ChildFirst®は、アナトミカル・ダイアグラムの使用を2つの方法で教えている。第一の使用方法は、オープン・インビテーションの後、ある一定の年齢（10歳以下）の子どもに対して、子どもが身体のさまざまな部位を何と呼んでいるかを知るために使用する。第二の使用方法は、年齢を問わず、子どもが身体のどこに性的接触があったかとか、身体のどこに身体的危害が起こったのかを打ち明けてくれたり、詳細を語ってくれた後、すなわち、被害の開示後に、それがどの身体部位に起こったのかを説明してもらう目的でを使用することである。

アナトミカル・ドールとは異なり、アナトミカル・ダイアグラムに関する研究は比較的少なく、これらの研究が司法面接臨床の現場に適用できるかどうかは議論の余地がある

（Gundersen, 2016; Lyon, 2012）。OJJDPの『ベストプラクティスガイド』によると、「記憶された出来事に関する子どもの言語開示に対して、さまざまな種類のツールが与える影響について、さらなる光を当てるためには継続的な研究が必要である（Newlin et al.）」とされる。*ChildFirst*®は、より多くの、より良い、中立的な研究そのものよりも、研究デザインの段階から、司法面接臨床現場の専門家が直接関与すること、および、性虐待だけでなく、身体的虐待・心理的虐待・ネグレクト・拷問（身体的・心理的苦痛を与える折檻）・多重被害においてもツールを利用することの是非に関する研究を求めている

(Gundersen, 2016, pp.21-22)。

司法面接における物的証拠の使用

司法面接に物的証拠を導入してよいのかどうかという論点は、長年議論されてきたテーマである。*ChildFirst*®は、司法面接や裁判、その他の捜査・訴追の局面において、子どもに物的証拠を提示する場合には、その前に十分な配慮をする必要があると考える。ほとんどの場合、子どもの保護や司法の場面において、必要な情報を得るために子どもに証拠を提示する必要はない。

子どもに証拠を提示すれば、情報開示を促したり、被疑者逮捕を早めることができるかもしれないが、物的証拠の中には子どもにとってトラウマとなるものもあり、このトラウマは将来にわたって長く続く可能性がある (Gewirtz-Meydan, Walsh, Wolak, & Finkelhor, 2018)。また、子どもの体験の詳細 (多くの場合、複数の種類の虐待が関与している) をすべて聞き取るのとは対照的に、捜査機関がすでに所持している証拠のみに焦点を当てるために証拠を子どもに提示することがかえって、事件を立証しにくくする可能性もある

(Turner, Finkelhor, & Omrod, 2010; Finkelhor, Omrod, & Turner, 2007)。別の言い方をすれば、すでに得られている証拠に焦点を当てることで氷山の一角に関する子どもの確認をもたらすかもしれないが、MDTが氷山そのものを見逃す結果になるかもしれない。

証拠の導入には高度な訓練が必要であり、これを行うかどうかは、可能な限り精神保健の専門家 (セラピスト) の意見を含めたうえで、多機関連携チーム (MDT) によって決定されるのが最善である。司法面接者とMDTは、子どもの健康・福祉・安全を考慮し、優先させるべきである (National Children's Advocacy Center, 2013, APSAC Taskforce, 2012)。

まとめ

ChildFirst®は、過去20年の間に何度も改正されてきたが、その都度、子どものニーズが専門家のニーズよりも優先されなければならないという理念を堅持してきた。*ChildFirst*®はまた、質の高い司法面接の研修を、地域や州レベルで受けられるようにすることに専念し、惜しみなく、その努力を続けてきた。もし、質の高い研修が受けられなかったり、手頃な価格で受けられなかったりすると、MDTはマルトリートメントの申立てを適切にアセスメントすることができず、司法において社会正義を追求し、子どもや家族のために重要なサービスを確保する能力が著しく損なわれてしまう。簡単に言えば、質の高い研修は、わが国の子ども保護制度の基盤なのである。

我々は、どの裁判所管轄区にも、MDTによる調査・捜査の枠組みで司法面接を適切に実施することが、いかに複雑な過程であるのかを教えることのできる専門家がいると信じている。実際、現地の専門家は、州法の違いや各地の裁判官の特性に配慮しつつ研修することができているし、各地の文化や地域社会を深く理解していることで、*ChildFirst*®司法面接研修をより効果的に実施することができていると、我々は信じている。コロンビアや日本

だけでなく、アメリカ全土の約20州で20年にわたり、この研修を実践し続けてきたことは、現場の専門家に対する我々の信頼が正しいことを示している。

著者について

リタ・ファレル（学士）は、Zero Abuse Projectの*ChildFirst*®ディレクター。20年以上、この分野に携わり、*ChildFirst*®司法面接研修プログラム、*ChildFirst*®アーカンソー州プログラム、司法面接者のためのアドバンスト・コースおよびプログラムの開発を担当している。

ビクター・ヴィース（法務博士、修士）は、Zero Abuse Projectの教育・研究ディレクター。全米子ども虐待事件起訴センター（the National Center for Prosecution of Child Abuse: NCPA）の元事務局長、暴力と虐待に関するアカデミー（the Academy on Violence and Abuse）の元理事長。